



走り寄っているつもりだった。

踏みしめていたつもりの地面？がだんだんと柔らかく頼りなくなってゆく。

そのうち沼の中を進んでいるようになった。

暗い靄がヌルヌルと身体にまとわりついてくる。

もどかしいほど距離は縮まらなかった。

水中の人型のように、殉の姿は上下無く漂っていた。

あと、すこし

あとチョット…

もう半分泳ぐように身悶えし続ける加夏子の手が殉の身体に触れた。

瞬間、何かが弾けた。

爆発のようだった。

吹き飛ばされる感覚に、加夏子は思わず目を閉じた。

◇

まっしろだった。

目を開けると一面が白で塗りつぶされていた。

虚無ではないが、『何もない』という事実が辺りを満たしている…そんな感じであった。

殉が立っていた。

着ている病院服も白く、まるで首と手足だけがそこに居るような奇妙な姿だった。

「じゅん」

加夏子は一步、踏みだそうとした。

膝から力が抜け、その場にへたり込んでしまう。

「え？」

「来たんだね。くるんじゃないかと思ってた。でも駄目だよ、すぐ戻らなきゃ」

優しい目をした殉が、ゆっくりと加夏子のそばまで来て手を差し出した。

「この世界を作ってられるのもほんの少しの間だけさ。もう僕には力が残ってない。カナが僕の病気に同調しちゃったら大変なことになる。でも嬉しいよ」

差し出された手につかまって、加夏子はかろうじて立ち上がった。

力がでない。

頭がぼうっとする。

身体が痛い、痒い、気持ちが悪い。

ひっきりなしに吐き気がし脱力感に襲われる。  
力を振り絞らないと殉の姿がハッキリ見えない。  
呼吸が苦しい。

その全てが今、殉が味わっている苦痛なのだ。  
加夏子は泣きたくなかった。  
何も出来ない、してあげられない自分が情けなかった。

「ワタシ、どうしてもジュンに伝えたいことがあったの。いwanaきゃならないことがあったの」  
「…ゴメン、知ってたんだ、ボク…」  
「!？」  
「知ってて知らんぷりしてた。怖かったんだ。僕が死んだあとカナと赤ちゃんが二人きりで残されるなんて、僕には耐えられなかった。だから…」  
「だから何も言わずに黙って死のうとしたの？ ひどい！ ひどいよジュン！！」

「カナ…」

加夏子の絶叫に、殉がたじろいだ。

「なに勝手に死のうとしてるの！ 九十九先生だって、アタシや碧ちゃんだって、ほかのみんなだって、ジュンを助けようって必死に頑張ってるのよ！ お兄さんだって骨髄移植してくれた、輸血が足りなくなったら真山さんだって協力してくれた、なのになによ！ なに悟った顔して逝っちゃおうとしてるのよ！！」

半分怒鳴りながら加夏子は叫び続けた。

「ジュンはパパなのよ！ お父さんになるの！ なれるの！ アタシと一緒に赤ちゃん抱くのっ！！ お願い、いっちゃダメッ！！」

イメージの殉が加夏子を柔らかく包み込んだ。  
息づかいまで聞こえる殉の身体に、加夏子は抱きついた。  
強くしがみつく。

「…逝かないよ、まだ…」

加夏子の髪を撫でながら殉が呟いた。

「僕にもわからないんだ。見ただろ？ この病気。凄い病気なんだ、とてもやっつけられるとは思えない。だからここで、静かに最後の時がくるのを待ってた。でも… みんなが支えてくれてた。僕、もう少し頑張ってみてもいいのかな？」

殉の胸のなかで加夏子が激しく首を上下させた。

「生きようとしていいのかな？」

顔をあげ、殉の唇に重なった。

暖かった。

言葉はいらなかった。

長いキスが終わり、加夏子は濡れた瞳で殉を見上げた。

「…約束は出来ない。でも僕達、結婚しよう」

「嬉しい。アタシ待ってる、殉が戻ってくるまで。ずっとずっと待ってる、二人で」

「辛くないかい」

「大丈夫、アタシだって強くなったんだよ。いつまでも待てる。だから必ず戻ってきて」

「ああ、かえってくるよ。きみたちの…君と美幸の所へ」

「みゆき？」

「ゴメン、勝手に考えちゃった、子供の名前。美しく幸せな子…ダメかな？」

「碧ちゃんが聞いたのって、それだったんだ。素敵名前だね。でもどうして女の子だってわかるの？」

「感じるんだ、君の中から。きっとカナに似て可愛い子だよ」

殉の姿が霞み始めた。

その姿が消え、意識が途切れるまでずっと加夏子は殉を見上げ続けた。

◇

「…ちゃん…加夏子ちゃん…聞こえるかい？」

うっすらと目を開けた加夏子のベッドの脇には、見慣れた顔が並んでいた。

九十九と医師達が。

碧が。

恒彦と紗季子が。

ヨシオが。

銀さんが。

真山が。

北山が。

殉の兄が。

皆、心配そうな顔で覗き込んでいた。

「…大丈夫、かれ、帰ってくるって…」

奇妙に満たされた気分のまま、加夏子は見下ろす人達に告げた。

◇

長い、永い月日が流れた。

肝移植は成功し、だが殉の意識は戻らないまま年月だけが過ぎていった。  
肉体の機能は正常値に近付いていたが、意識だけは戻らなかった。  
脳死の判定はなく、殉はただ昏睡状態のまま歳月を積み重ねていった。

そして人々は…

◇

「いってきまあ～す！」  
「合唱の練習がおわったら、まっすぐ帰ってくるのよ」  
「はあ～い」

清水家の門を、ランドセルを背負った少女が勢いよく飛び出していった。

「みーちゃん、車に気をつけるのよ」  
「わかってるって、おばあちゃ～ん！」

白髪の混じった髪を品よく結い上げた紗季子が庭から声をかけたが、少女はどこ吹く風といった感じで走り去っていった。

「元気なのはいいんだけど。まったく、誰に似たのかしらねえ～」  
「パパの隔世遺伝かもよ、ママ」

開け放した縁側の奥で、台所の片付けをしながら加夏子が言った。

「あのヒトが生きてたら大変だったわね。おっきな子供とちっちゃな子供でひっちゃかめっちゃかよ」

鉢に植えたミニバラに霧吹きで葉を吹きながら、紗季子が小さく溜息を漏らした。  
清水恒彦は2年前、食道癌でこの世を去っていた。

「でも、それはそれで楽しかったでしょうね」  
「ママ、パパがいなくてさみしい？」  
「チョットね。でもあなたたちが居てくれるから全然大丈夫。少しウンザリするくらい」

紗季子は可愛く舌を出した。

「そういえばね、この間、銀さんからメールが来たのよ」

加夏子の言葉に、霧吹きをする紗季子の手が止まった。

「久我さん、から？」  
「うん。静岡で元気にやってるって。ヨシオ、すごい働き者らしいよ。収穫が多過ぎて出荷が大変みたい」

久我銀次はリハビリトレーナーを辞め、身寄りの無いヨシオを養子として引き取り静岡で石垣苺の農園を営んでいた。佐野碧も住み込みで働いている筈だった。

「元気でやってるのね。よかった」

歳のわりにふくよかな胸元をそっと押さえ、呟くように紗季子が出た。

「夏になる前にみんなで苺狩りにいかない？ ウチの苺は甘くて美味しいって、銀さん書いてたよ」

「そうね。夏になる前に…いきましょう、みんなで」

紗季子がニッコリと微笑みかけた。